

大地

21号
1992. 5. 25
真宗大谷派 浄国寺
☎(23) 5724

新緑の中や吾子の齒
はえそむる

中村草田男

雪の少ない冬のあとの、風ばかり吹いている肌寒い春。その春もいつしか緑あふれる初夏の候となりました。つつじやばたんもそろそろ終り、頸城平野は今、田植えを終えた田んぼが鏡田の名そのままに、五月晴れの空を映しております。

護持会も昨年度の決算報告を済ませて、新しい予算を組み、又新たなスタートをきりました。予・決算につきましては、各地区の世話人を通して、あるいは直接ご報告した通りです。

本年度も護法護持のために、皆様のお力添えをお願い致します。又、行事のつどご案内を差し上げますので是非ご参集ください。

どうぞ一年に何度か、寺に集まって、同行の人と顔を合わせて法話を聞き、話し合う機会に足を運んで下さい。

日記より

山崎 武雄

一九八十年

二月二十三日(土) 快晴

全く久しぶりに陽光輝き、青空一杯となり気も自ら晴々とする。今度こそ冬も峠をこえたと思う。二月の下旬だからいくらか長くとも一ヶ月后には間違いない無く待ちに待った春が来ると思うと子供のように嬉しい。思えば去年は暖冬無雪で旧庫裏から一同、上野さん飯塚さん等に手伝って貰って本堂の仮設台所湯殿をもつ室に引越したのだ。今の豪雪と比べて感無量。午前十一時より藁靴にかんじきをかけて雪踏みをし、子供等にそり遊びの場を作ってやる。左程疲れず、或はこの分なら、一病息災のたとえもあり、案外、長生き出来るかも知れぬと一寸うぬぼれたりする。お昼にあぶらいための餅を皆と頂く。全く美味しい。

午后隆史と「そり遊び」をする。平凡の滑降を嫌い、小さい乍ら「ジャンプ台」をつくるなどこの子らしくて面白い。

「おひな様」を出しておかざりする。

三月十三日(木) 曇り後晴れ

午前十一時よりの砺波師御葬儀に真

宗寺様へ行く。参列者、僧侶二十数名を始め一般の方も多く満堂。皆故人のお徳を偲んでおり、式も質素ながら弔辞挨拶もよく立派な御葬儀なりき。午后三時より忌中七日にも招ばれる。新任職のご挨拶もお人柄よくあらわれ胸うたれる。

五時半、一生の間よき人にお会い出来た身の幸を思ひつつ帰宅。上野さん来て、午后、参道・台所口等すっかり除雪してくれる。これも有難し。

◎石田暉市郎さん午前九時半なくなり睦枕経を読みに行く。親切なよい人だった。勿体ない人である。

三月十四日(金) 曇り

朝、床の中で一昨日お聞きした故砺波老師のお言葉をもう一、二度かみしめて見る。一生は「くいのない幸せな生涯だった。何の心配もなく安らかに往生出来る」と文字通り眠るが如き大往生だったとの事。我が身を省みる時同じ心境にてほんとうに嬉しい。発声不能乍らこの五年間はすべての点で幸福の連続だった。有難い日々だった、とつくづく思う。

夕方五時法林寺に行き、明日の石田氏の葬儀に北部同朋会の代表、焼香の事につき打合せ。又ともども亡き老師の想い出を語り合う。

「生活の根っこ」にあるもの 欧州老人ホーム視察の感想

山崎 隆 昌

「イギリス人は歩きながらものを考える。ドイツ人は考えてから歩きだす。フランス人は走り終えてから考える。」

(ヨーロッパの諺)

この諺は、笠信太郎の随筆「ものの見方、考え方」の中に引用されていたものです。

この度、新潟県社会福祉協議会の海外社会福祉事業視察研修で、ロンドン↓ローマ↓パリと旅行をしてきました。旅行期間は二月四日～二月十三日、

真冬のヨーロッパです。視察が中心で、「名所観光」にあまり時間を取らず、人数も十二名(県下の老人ホーム職員)と、比較的ゆったりとした旅行でした。

この旅行をしながら、ヨーロッパについてあれこれ考える中、先の諺を思い出したので。ちなみにイタリア人について、この諺にならえば、フランスと同じく「走り終えてから考える」タイプでしょうか。やはりどちらも陽気なラテン民族ですから。

僕自身、老人ホームに勤務してから十八年になります。それを振り返ると

改めて、その時の長さに驚くとともに、十八年間の自らの仕事に、不安と痛みを感ずるところがあります。

それは、わたしたちが毎日「処遇」ということで、心身に著しい障害を持つ入所老人のお世話をしていることが、どのような意味を持つことなのだろうか、ということへの不安や痛みです。

入所者のほとんどの方々は、言葉では「こんな良い施設に入れて幸せものだ」と言われます。しかしほんとうの心の中では「長い人生の終わりを何でこんなところで」と泣いておられるかも知れません。その「生活の根っこ」のところが解らない。

それと、僕の中に、「社会福祉」等に代表される「ヨーロッパ文化」にたいするコンプレックスのようなものがあるせいかも知れません。(これはなかなか重症です。)

この視察旅行を通して、結果的にはこれらの課題に直接答えられないとしても、随分いろいろな事を学ばせてもらいました。

ここにこの視察研修で感じた事を箇条書きしますと、

① イギリスに特に感じたのですが、イタリアでもフランスでも、入所者の主体性(プライバシーも含めて)にたいする絶対尊重の姿勢です。その入所

者の人生はだれも犯すことができないという個人主義的民主主義を、話には聞いておりましたが改めて知らされました。例えば、寝たきりの老人でも個室が原則で、職員が仕事でその部屋に入るときは必ずノックし入所者の応答後入る、起床や就眠の時間の自由、食事の摂り方、入浴等の個人差等々、そこに生き方そのものという「根っこ」のようなものを感じました。

② ゆったりとした生活ペース。日本人の生真面目さ、せっかちなことはよく言われるのですが、イタリアのあのおおらかさ、大雑把なこと。何しろ昼食休憩時間が3時間ですから。

5つの施設ともですが、全体の生活がゆったりと流れているように思えました。実際フランスでの滞在3日間はアルベールビル冬季オリンピックの開催中にもかかわらず、空港にも、パリ市内にもオリンピックのポスター一枚見られなかったのに驚きました。

とにかく自分の生活ペースで進むのです。

③ 食事に(飲み物が特に大切)、とても力が入れられていました。施設設備全体の中でも、食堂や厨房設備の立派さがやたら目につきました。食事をいかに楽しむかに、ずいぶん頭をつけています。日本のインスタント食

品やスナック菓子について、つくづく考えさせられました。

④ 入所者の服装がしゃれていたことです。生活習慣の違いとは言え、寝ることに起きて生活することの区別のつけかたが非常にはっきりしていると思えました。街で見かける人々の服装は真冬のこともありましたが、ほとんど茶色、ネズミ色、濃紺等とても地味ですが、スマートです。(イタリヤはやや派手)

⑤ 生活の根底に宗教(キリスト教)が裏打ちされていることです。視察した老人ホームで信仰に生きる老人の姿に心うたれました。ローマのサンピエトロやパリのノートルダム教会で観光客(圧倒的に日本の若い女性)でこつた返す中、敬虔に祈る人々の姿を見ると、ときに、わたしたちが日常生活の中で、信仰に生かされることの意味が重くのしかかってくる。

前述のように、この視察研修で当初思っていた課題には何も答えは得られませんでした。が、とても有意義な視察であったとおもいます。

あえて結論めいたことをいえば、日本の福祉は日本人が、自分がいる施設の処遇は、自分自身で入所者に教えられながら生みだしていかねばならないことです。自分が立っている場所を少

しづつ少しづつ明確にする作業を通して、大地に「根っこ」を張っていくものだと思いました。
『イギリス人は歩きながらものを考える。ドイツ人は考えてから歩きます。フランス人は走り終えてから考える』
日本人はどうなのだろうか。そして私は。

中国吟行

俳句七句 山崎 睦

何処までも菜の花盛り何処までも

段々の菜花畑これよし

それぞれの色だしきって牡丹園

春の昏鐘ひと撞きす寒山寺

燃え立ちし緋桃の花の西瘦湖

野放しの黒豚閑かに草を喰み

桐の花咲く邑又も過ぎにけり

※今年、喜寿を迎えますが、年令とやせた体も何のその、春四月、九日間の中国旅行に行き、見聞を広めてきました。悠久の大地でも俳句をひねり出すのは、なかなか大層だったようですが、四句を評して俳句の先生は、この鐘ひとつ撞くまでは随分お金が要りました。ネエと笑いながら言われたとか。

若い友人である中国人の黄さんとも会い、旧交をあたためました。黄さんの五才になる娘さんは、オバアチャンと慕ってくれます。
我が家ではひそかに、インターナショナルおばあちゃんと呼んでいます。

桑取にて

山崎 慎子

桑取谷は三方を低い山に囲まれた、のどかな村で、人情の温たかな穏やかな所である。

高田に住むようになって間もない頃——今から二十年程前になるが、初めて桑取を訪れた時の安らぎは、今でも忘れることができないでいる。

小左エ門サの婆ちゃん（と隣近所の人）は親しみをこめて呼んでいる。その時生まれてはじめて会う人だったのに、もうずっと昔から知っている人のような懐しさを感じさせて甘えさせてくれた。

その日、当時六十代半ばの婆ちゃんの案内で母と一緒に裏山に登り、はじめてのわらび採りに挑戦したのである。山菜採りの名人の母をうならせる程の太くて立派なわらびが、採っても採っても次々に見つかって、大変な収穫をあげることができた。青空を眺めながら、婆ちゃんの握ってくれたおにぎりをほおばった後、へとへとに疲れてその場に寝入った私を尻目に、婆ちゃんと母は向い山に移り、又しても収穫。快い午睡から醒めれば、二人が向い山

から声をかけ手をふっている。不思議なもので、こんな時には蛇は出て来ないと確信できるし、実際出て来なかった。その時の収穫は乗用車のトランクにそこそ一杯という量で、こんな本格的な山菜採りは、私にとっては後にも先にもこれっきり。全く良い思い出である。

小左エ門の婆ちゃんもそろそろ八十代半ば。今でも横畑村の家にとった一人で暮している。白内障で目は見えにくく、耳も少々遠くて、足腰も弱ったと嘆いているけれど、顔色も良いし少しはにかむような素振りが、二十年の時の流れを殆んど感じさせない。

息子さん夫婦は親子四人、車で三十分程離れた町に暮している。そこには婆ちゃんの部屋もちゃんと用意されていて、いつでも一緒に暮そうと言って待っている。これまでも幾度か行ってはみたのだけれど、町の生活は、自分の仕事がなくして退屈で仕方がない。村に居ればいつでも好きな時に野良に出られるし、近所の人達と気軽に茶のみもできるし、秘密のゲームもできる。それに婆ちゃんは村の人気者だから、いつでも誰彼となく声をかけ顔を見に寄ってくる。雪の時でも隣の喜左エ門サの誰かが、黙って道をつけてくれる

し、息子さん達も殆んど週末を桑取で過ごしてくれている。

ずっと前、つれあいのおじいちゃんが亡くなった後に、いたちが住みついた時、婆ちゃんは半ば本気で、じいちゃんが化けて出たかと思つた程、怖い夜を何日も過ごして、捕えられて正体のばれたいたちは今、剝製の剥製になつて無言で婆ちゃんと暮している。肩肘張って一人居を通す、というのでは決してなく、そうしたいからそうするといふ全くの自然体の婆ちゃん。八十数年の来し方は、想像しきれぬ程さまざまのことがあつたに違いない。喜びも、悲しみもいろいろさまざま。でも婆ちゃんは「そんなもん、あつたかのオ」といった顔で、いつ会つても懐しく、その温かさの中に包まれて、ホッとするのである。

あとがき

さわやかな季節になりました。「大地」21号をお届けします。前住職・武雄の日記は亡くなる一年前のものを抜粋しました。早いもので来年の五月に十三回忌を迎えます。年々想い出が鮮かになるような感じがしています。日記の中から、生きる喜びを高らかに謳い、念仏と共に在った父の姿が浮びあがってくるようです。

(慎)